

おわりに

色濃くなった六甲山の緑の中に、雨に濡れたやまあじさいの白い花がひっそりととけこみ、見る人の心をほっと和ませてくれます。

あの悪夢のような大震災から、間もなく6ヶ月を迎えようとしています。その被害はまさに想像を絶するものでした。あまりにも若く、志半ばで逝った留学生は、阪神地域全体で12名にもなります。悔やんでも悔やみ切れません。その他 重傷を負った者、大切な友や知人を亡くした者、住居を失った者、研究のための貴重な資料、サンプル、データ等を失った者、収入の途が途絶えた者、一時帰国せざるを得なかった者、留学を断念せざるを得なかった者、精神的に不安定な状況に追い込まれた者など、程度の差こそあれ、被害を免れた留学生はほとんどいなかったといっても過言ではないでしょう。

さて、今振り返りますと、あの日は不気味な沈黙が広がる中、異様な雰囲気の中に夜が明けました。それは我々人間が二十数秒間の出来事で、日常の世界からいきなり非日常のカタストロフィーの世界へ投げ込まれた驚きに、なす術をうしなってしまった一瞬だったのかもしれませんが。しかし、あの日の午後2時を過ぎた頃から、自宅にも余震の恐怖・戦慄を吐き出す留学生、方向性を失い何をどのようにすればいいのか、また、友の安否をはじめ、情報、アドバイスを求めてくる留学生たちの悲痛な叫び、切迫した問い合わせがあり、通話中にも電話のキャッチフォンの発信音が鳴り続ける状態が、数日深夜まで続きました。なんとかして彼らの悲痛な叫びを受けとめてあげたい、また、生の声を記録として残しておかなければならないという強い思いに駆られました。

1月17日、それは震災と非力な留学生アドバイザーとの闘いの幕開けでもありました。それはまるで一瞬のうちに「地震」という名の巨象に踏みつぶされた留学生たちの日常生活を取り戻すために、ちっぽけな蟻ご仲間と共に闘っているようでもありました。そしてその闘いの内の一つに、この文集作りがあったのです。「はじめに」に述べられているように、心のケア、追悼、記録を残すという三つの目的で、留学生たちには、ありのまま自分の言葉で思いを吐き出してもらいたいと思いました。しかし、正直なところ私のような者があの混乱した状況下で、そのようなことが果たしてできるのだろうかという不安がありました。ちょうどその時でした。名古屋大学の留学生センターで、同じく留学生アドバイザーをなさっている三宅政子先生から神戸地域の留学生たちと私の身を案じるお電話をいただきました。そしてその時、まったく思いがけないお申し出もいただきました。それは「こういった危機状態の時には、思わぬお金が必要なものですよ...、しかも、瀬口さんが自由に使えるかたちのものじゃないと、なんの意味もない...、神戸の被災留学生たちのために是非使ってちょうだい」というものでした。そして、1月26日には三宅さんの熱い気持ちと共に、神戸の留学生たちのためにご法外な額が送金されて来たのです。その時、留学生の、留学生による、留学生のための震災文集を是が非でも作らなければ、と決心したのです。そこで、異文化間カウンセリングにお詳しい一橋大学の横田雅弘先生に連絡をし、実際に留学生の生の声を集めるためにどのようにすればよいか、相談にのっていただき、貴重なアドバイスを数々いただきました。その後、JAFSA(外国人留学生問題研究会)の方からも文集を作ってはどうかとのお申し出をいただき、出版にかかわる費用をいただくことになりました。

一ヶ月後にはボランティアの留学生による留学生震災文集編集委員会も発足しました。手記は神戸大学の枠をこえて阪神地域で学ぶ留学生を中心に、口コミ方式で募集をしました。しかし、2月から3

月にかけて被災留学生にとっては震災後の困難な生活に加え、論文作成、発表、リポート作成、及び、学部、大学院入試の時期であり、(留)学生にとって一年のうちでも最も厳しい時期でもありました。皆に書いてもらうように勧めることはできても、決して強いるようなものでもないで、無理のないよう寄稿を待ちました。結局、五月の初めまでに、留学生からはインタビュー3編を含め、56編の生の声と、日頃多くの留学生と直接接している日本人から8編の寄稿をいただきました。

「あまりにも多くのことがありすぎて感情ばかりが先走り、とても書けない」、「思い出したくないから、今は、書きたくない」などと言う留学生がいる一方、是非この機会に書いて記録を残しておきたいと言って、三月末の帰国を前に、取りあえず英語で長い手記を寄せ、帰国後、母語での文章をE-mailで送ってきてくれたMさん。「自分のためにこの文章を書きました。まだ、間に合いますか?」と言って4月半ばに長い手記を提出してくれたHさん。「本当は今、天国にいる親友、Jさんに宛てた手紙を書きたかったのですが、何回書いても数行書くとペンが止まってしまい...結局自分のことを書いてしまいました。内容についてはまだまだ不満です」と、言いながら強烈な体験記を記してくれたOさん。各人、さまざまな思いで貴重な体験を語ってくれました。

心のケアの目的が大きかったので一人の文字数は制限せず、また一人でも多くの人に読んでいただきたいという方針から、寄せられた原稿はすべて(インタビュー3編は除く)日本語、英語でも読んでいただけるようにしました。翻訳にあたっては、寄稿者本人、または留学生たちによる翻訳グループが活躍してくれました。英文和訳については、国際協力研究科の日本人の院生たちが協力を申し出てくれました。

現在博士課程の最終学年で、博士論文の仕上げや学会発表などで超多忙な毎日を送りながらも、中国語のすべての入力、一部の翻訳・編集に全面的に力を貸してくれたのは● 貴生さん(自然科学研究科博士課程、中国)。授業の合間に、入力から一部の翻訳、英語編一のすべての編集作業を、深夜まで徹底的に議論を重ね、責任を持ってあたってくれたのはハナ(法学部2回生、ニュージーランド)とカースティ(経営学部2回生、オーストラリア)。震災で住まいは失っても明るさと勇気を失うことのない二人は、とりあえず、芦屋のテニスコート内に大学生協の建てた仮設住宅に住んでいます。編集作業の最終日には、白みかけた東の空を背にバイクにまたがり、「バイバーイ!」と●さんと私に手を振ってキャンパスを後にしました。韓国人グループをまとめてくれたのは、呉 美英さん(法学部3回生、韓国)。彼女は親友を失い、家を失い、この4月からは規則とかで奨学金までも打ち切られ、心に深い傷を負いながらもよく頑張ってくれました。翻訳は勿論のこと、いつも落ち着いて的確な意見を出してくれるのはブラシャントさん(文化学研究科博士課程、インド)。4月から経営学研究科に入学し、毎週出される厳しい課題に追われ、パニック状態になりながらも、ポルトガル語とスペイン語グループのまとめ役と翻訳を担当してくれたのはマルシア(経営学研究科修士課程、ブラジル)とマルガリータ(経営学研究科修士課程、ウルグアイ)。英語以外マレー語、インドネシア語もできる貴重な存在のウェロディー(経営学部、マレーシア)。インタビューをはじめ、英文和訳グループとの連絡調整役をかって出してくれたのは、陰山佳代さん(国際協力研究科修士課程、日本)と片山弘倫さん(国際協力研究科修士課程、日本)の二人でした。

翻訳に直接携わってくれた他の(留)学生たちの名前をここに一人ひとりあげることができないのは残念ですが、この文集「忘れられない・・・あの日」--神戸からの声---("Never to forget"--- Voices from Kobe---)は、65名の寄稿者はもとより、実に多くの若い頭脳、エネルギー、温かいボランティアスピリットにより出来たものです。世界各国の学生が同じ目的に向かって、協力してくれたからこそ生まれた素晴らしい賜物です。この文集が多くの方々目のにも触れ、共感を呼び、相互理解の一助となれば

編集責任者といたしまして望外の喜びでございます。

最後に、この文集を作るにあたってはご寄付もいただき、心より厚く御礼申しあげます。また、神戸大学留学生センター、センター長村井隆之先生にも常に心強い励ましのお言葉をいただきました。留学生センターの先生方には、常に温かい目でさまざまのよきアドバイスをいただきました。留学生課の職員の皆さまも、留学生からの問い合わせや連絡など、文集作りにいろいろご協力くださいました。深く感謝申しあげます。日本全国のみならず世界中から留学生たちのために、物心両面で温かい援助をお寄せくださった方々にも、この文集を通じて、心より感謝の気持ちを表したいと思います。

1995年6月30日

留学生震災文集編集委員会

編集責任者 瀬口郁子



編集責任者からのお断りとお願い

翻訳につきましては、できるだけ寄稿者本人にお願いしました。その翻訳文は明かに思い違いをしている場合を除いてこちらで手を入れることなく、寄稿翻訳者の気持ちを大切に個性を残すようにしました。また、母語を日本語と英語に翻訳するという作業の過程で、母語より直接翻訳出来ないものも何編もあり、それらは間接翻訳せざるを得ませんでした。それぞれの翻訳は誠意をもっておこなわれましたが、自ずと限界があり、原文と少し意味が違ってしまっている恐れがあります。翻訳文にはすべて翻訳担当者の名前が記されていますが、その翻訳文につきましては責任のすべてが編集責任者にあることをお断りしておきます。

なお、この文集をお読みくださった皆さま方からの率直なご意見、ご感想、など是非お待ち申し上げております。下記宛、郵便またはe-mailでお寄せいただければ幸いです。

657 神戸市灘区鶴甲1-2-1 神戸大学留学生センター
瀬口郁子研究室内
「留学生震災文集編集委員会」宛

kirsty@icluna.kobe-u.ac.jp
prashant@icluna.kobe-u.ac.jp
welody@icluna.kobe-u.ac.jp
zhai@gradsys3.scitec.kobe-u.ac.jp

<留学生震災文集編集委員>

コウノ, マルシア	(経営学研究科, ブラジル)
リー, ハナ	(法学部, ニュージーランド)
マッキャン, カースティ	(経営学部, オーストラリア)
呉 美英	(法学部, 韓国)
パルデシ, プラシャント	(文化学研究科, インド)
タン, ウェロディー	(経営学部, マレーシア)
● 貴生	(自然科学研究科, 中国)

ーアルファベット順ー

In closing...

White wild hydrangea flowers nestle rain-moistened amongst the deep verdure of Mount Rokko, bestowing a soothing sense of serenity upon the beholder.

Six months will soon have passed since the nightmarish earthquake and the resultant damage that exceeded all imagination. The number of foreign students in the Hanshin area to depart this world in the height of their youthful aspirations came to twelve-an unfair and lamentable tragedy. Besides those twelve, many sustained injuries, while others suffered the loss of friends or acquaintances, accommodation, or data, samples and other material vital for their research work. Some, even losing their means of income, were forced to return to their country permanently or as a temporary necessity. Add all this to the traumatic stress, and it is no exaggeration to say that hardly any foreign students escaped unscathed; only the degree of damage differed.

Looking back now on that day, I recall the dawn breaking amid a bizarre atmosphere. An eerie silence pervaded, probably owing to the people's surprise at being flung so suddenly by a twenty second event into a catastrophic world. However, by two o'clock that afternoon, my house swarmed with foreign students: the shivering from the fear of aftershocks, the disoriented at a loss as to what to do, the enquirers after friends, and the askers of advice with pained cries. The receiving of urgent enquiries over the phone, the tone of the catch phone ringing constantly as others tried to call in, continued late into the night for days on end.

Thus the seventeenth of January saw the opening of the curtain on a battle between the Earthquake and a powerless international students advisor. The situation was akin to a puny ant fighting with her comrades to restore the lives of students trampled by an enormous elephant named Earthquake. The making of this anthology was one part of this battle. As mentioned in the preface, I thought that the students should pour out their feelings in their own words with the three aims of: in memoriam-to pray for the repose of the souls of the dead; in curam-to soothe psychological wounds and in memorandum-to record the experience. I must admit though that I was plagued by doubts as to my ability to complete such an ambitious task under the confused circumstances. Luckily, at that time Professor Masako Miyake, International Students Advisor at Nagoya University, called me, concerned about myself and the international students of the Kobe region and proceeded to propose something entirely unanticipated on my part:

"In this time of crisis you need an awful lot of money....and I think that if it's not in a form where you can spend it freely, it will be of no real use to you..., please use this money for those students who suffered in the earthquake."

And sure enough, on the twenty-sixth of January a sizeable sum of money for the foreign students of Kobe arrived, along with Professor Miyake's warm regards. I now firmly resolved to see the realisation of an 'of the students, for the students and by the students' type anthology of reflections on the disaster. I hastened to contact Professor Masahiro Yokota at Hitotsubashi University (Tokyo), a man well versed in matters relating to trans-cultural counselling, and was able to receive much valuable advice on the practicalities of going about gathering the vox of foreign students. Shortly after this, I received another proposal requesting the orchestration of this project, this time from JAFSA (Japan Association for Foreign Student Affairs), and I was thereby supplied with the publishing-related costs, enabling this project to proceed.

One month hence, the International Student Editing Committee was inaugurated. Surpassing the body of Kobe University, authors of memoirs were sought via word of mouth, centering on those foreign students studying in the Hanshin area. However, from February to March those afflicted foreign students, in addition to suffering lifestyles of inconvenience, had the added burden of dissertation writing and presentation, reports, et cetera, and the graduate school and faculty entrance examinations of university also happened to fall during that

time, Thus for the students this was easily the most difficult time of the year. Even if one were to urge everyone to write a contribution one certainly couldn't force them to, so all there was left to do was to await the arrival of contributions. Eventually, by the beginning of May we had collected some 3 interviews, 56 prose pieces plus a further 8 accounts from Japanese who were closely connected with foreign students during the time of the crisis.

While responses like, 'There are just too many things, and I keep getting overcome with emotion. I simply cannot write it', or, 'I don't wish to write it now because I don't want to remember', came from some of the students, others like Mika for instance, said that they would really enjoy the opportunity of leaving some sort of record of their experiences. Before returning home at the end of March, Mika submitted a lengthy piece in English and after returning home, sent another in his mother tongue via E-mail. Then there was 'Hanna who, handing in her voluminous effort in mid-April said, 'I did this for myself. It isn't too late is it?!' Mi-young recorded her horrific experiences saying, 'The fact is I wanted to write a letter to my dear friend, Jie, but how ever many times I tried, after a few lines my pen just ceased... In the end I just ended up writing about myself. I am still not happy with the content.'

That is, each narrator contributed their valuable experiences for different reasons.

Since the aim of spiritual relief was high on the list of priorities, the length of the pieces was not limited, and in the hope that one person's work could be read by many, every piece within can be found in both English and Japanese (excluding the three interviews). The authors themselves or a translation group made up of foreign students were active when it came to translation work, while the students from the Graduate School of International Cooperation were most generous in their assistance with English-Japanese translations.

Currently passing exceedingly busy days in the last year of his doctoral studies with the completion of his thesis and academic presentations, Zhai (Graduate School of Science and Technology, China) gave his all, completing all the typing up of Chinese and part of the translation and editing work. Committed to the editing of English language and part of the translation work, typing during free classes, involved in in-depth discussions lasting late into the night, Hannah (Faculty of Law, Second Year, New Zealand) and Kirsty (Faculty of Business Administration, Second Year, Australia) bore much responsibility. Despite living in temporary accommodation erected by the University Co-op on a tennis court in Ashiya after losing their home in the earthquake, the two failed to lose their cheerful and courageous dispositions. On the final day of editing operations, they got on their motorcycles and with a brightening Eastern sky providing a backdrop, waved at Zhai and I, gave us an enthusiastic 'Bye Bye!', and left the campus behind. Organising the South Korean group was Oh (Faculty of Law, Third Year, South Korea). She suffered the loss of her dear friend and her home, and from April even her scholarship was revoked on a minor technicality. But while bearing these scars deep within her breast, she gave her everything. Aside from translating, delivering precise opinions with unceasing composure was Prashant (Graduate School of Humanities and Social Science, India). With her knowledge of Malaysian and Indonesian in addition to her native English, Welody (Faculty of Business Administration, Malaysia), proved to be a priceless presence. Entering the Business Administration Research Department in April, and swamped with difficult reports each week, taking the helm of the Portuguese and Spanish group as well as rendering translations, despite being in a virtual state of panic, were Marcia (Graduate School of Business Administration, Brazil) and Margerita (as above, Uruguay). Conducting the interviews and acting as communications coordinator with the English-Japanese translation group, were Kayo Kageyama (Graduate School of International Cooperation Studies, Japan) and Hiromichi Katayama (as above, Japan).

It is unfortunate that I cannot list all of the numerous other students who helped directly with the translation work here, but this anthology, 'Never to forget-Voices from Kobe' while stemming essentially from the 65 contributors, appears solely owing to the energy, enthusiasm and warm voluntary spirit of many young minds. This is the tender fruit born of the cooperation of students from all over the world's striving toward a common goal. As the chief editor, it would be an unexpected pleasure should this publication prove to reach

the eye of many a reader and invoke a chord of sympathy and understanding,

Lastly,I would like to extend a cordial thankyou for the donations that made this all possible.I am also grateful for the constant encouragement I received from the wonderful staff of the International Student Centre and its Director,Professor Takayuki Murai.To the staff at Student Exchange Affairs who cooperated in a myriad of ways from answering students' enquiries to the making of these memoranda: to you,I extend my heartfelt thanks.To everybody else from around Japan and all over the globe who kindly gave spiritual and/or material support to the foreign students here,I wish to express my humble feelings of sincere gratitude through these pages.

30th June 1995

Ikuko Seguchi

Editor in Charge

International Students Editing Committee



Editor's Notes

As far as possible the individual authors of these works themselves were asked to translate the original. Excluding blatant errors in translation no alterations to the text were made by the editor to ensure that the author / translators individuality was retained. Furthermore, in many cases the direct rendering from the author's native tongue into Japanese or English was not possible and an indirect translation unavoidable. Each rendering was undertaken as faithfully as possible with regard to the original, but owing to the presence of personal limitations, slight differences between the meaning in the original and the rendered work may be apparent. The name of those responsible for each translation is recorded within but full responsibility for the translated works shall be borne by the editing staff.

Frank opinions and impressions from the reader are welcomed. Any correspondence forwarded to the below address will be appreciated.

'International Students Editing Committee'
c/o Ikuko Seguchi
International Students Centre, Kobe University
1-2-1 Tsurukabuto, Nada-ku
Kobe-shi 657
Japan

International Student Editing Committee

Kono, Marcia	(Graduate School of Business Administration, BRAZIL)
Lee, Hannah	(Faculty of Law, NEW ZEALAND)
McCann, Kirsty	(Faculty of Business Administration, AUSTRALIA) e-mail:kirsty@icluna.kobe-u.ac.jp
Oh, Mi-Young	(Faculty of Law, KOREA)
Pardeshi, Prashant	(Graduate School of Humanities and School Science, INDIA) e-mail:Prashant@icluna.kobe-u.ac.jp
Tan. Welody	(Faculty of Business Administration, MALAYSIA) e-mail:welody@icluna.kobe-u.ac.jp
Zhai, Gui Sheng	(Graduate School of Science and Technology, CHINA) e-mail:zhai@gladsys3.scitec.kobe-u.ac.jp

<-Listed Alphabetically->